李白と高適

筧　文生

はじめに

李白（七〇一～七六二）が、高適（七〇〇～七六五）や杜甫（七一二～七七〇）といっしょに、天寶三（七四四）載の夏から秋にかけて、梁・宋の間を漫遊したことは、よく知られている。杜甫は、晩年になってから、往事を懷しんで、たびたびこの時の交遊を詩に詠んでいる。しかし、李白の詩集には、當時をあからさまに回顧した詩はほとんど殘っていない。高適の詩集の方には、內容からその時に作ったと推定できる詩もあるのだが、後から詩題を改創したらしい形跡がある。おそらくこれは、兩者が安祿山の亂をきっかけに敵對關係になったことと無關係ではあるまい。

本稿の目的は、李白と高適が敵對するに至った經過を檢證するとともに、二人の詩集から、意圖的に伏せられている當時の彼らの交遊をもう一度よみがえらせることにある。

一　肅宗・永王璘の對立と高適

まず、安祿山の反亂から、永王璘の擧兵、そして李白と高適が敵對するに至った經過を、『資治通鑑』や『舊唐書』・『新唐書』などの史料によって、たどっておきたい。

天寶十四載十一月九日、范陽で反旗をひるがえした安祿山は、またたく間に洛陽を占領する。翌年六月九日、潼關が陷落すると、長安はたちまちパニック狀態となり、十三日未明、玄宗は楊貴妃姉妹や楊國忠のほか、ごくわずかの側近を連れて、宮城を脫出する。しかしその翌日、馬嵬驛まで來た時、近衞兵が騷ぎ出し、楊國忠は慘殺され、楊貴妃も死を賜る。この後、一行は二手に分かれ、皇太子は北方の靈武へ、玄宗は西南の蜀へと向かう。皇太子は七月十二日、靈武の城南樓に於いて卽位、そのことを玄宗が知ったのは、ちょうど一か月後の八月十二日、彼らが成都に到着した七月二十八日から數えて二週間も後のことであった。

動亂が起こった前後、高適はどこで何をしていたのであろうか。周勳初『高適年譜』（一九八〇年　上海古籍出版社）等によりつつ、彼の行動をたどってみよう。天寶十一載秋、封丘（現在の河南省封丘縣）縣尉を辭めて長安にやってきた高適は、杜甫や岑參、儲光羲らと交わり、詩文の應酬をする。その翌年の秋、新たな職を求めて、隴右・河西節度使の哥舒翰に會うため、河西幕府のある涼州（現在の甘肅省武威市）、ついで隴右幕府のある鄯州（青海省樂都縣）を訪ねて、やっと面識を得

ることに成功。翌天寶十三載、哥舒翰に見こまれた高適は、左驍衛兵曹の肩書で河西幕府の掌書記に採用された。そしてその年の夏、高適は、哥舒翰にともなわれて入朝し、玄宗の面前で、哥舒翰の推賞を得る榮に浴する。それから一年あまり、河西の幕僚として勤務していた時に、安祿山の亂が起こったのである。

周勳初氏によると、天寶十四載の末、朝廷は、反亂軍に對する臨時措置として、河西節度使配下の幕僚を、急遽、河東へ配置した。その結果、高適は絳郡（現在の山西省新絳縣）の長史（兵馬を掌る官）に任じられる。翌天寶十五載、左拾遺、ついで監察御史に任じられた高適は、哥舒翰を助けて、潼關の守備につく。しかし、六月九日には哥舒翰が降伏し、潼關は安祿山の手に陷ちる。高適は、長安に馳せもどり、玄宗に對して「請う、禁藏を竭し、死士を募りて賊に抗さば、未だ晩しと爲さず」（『新唐書』高適傳）と獻策する。しかし、すでに戰意を失っていた玄宗は、十三日未明、ひそかに長安を脱出してしまったのである。

多くの重臣たちとともに都に置き去りにされた高適は、間道づたいに一行を追いかけ、河池郡で追いついた。『舊唐書』高適傳は、次のように記す。

「翰の兵敗るるに及び、適　駱谷より西に馳せ、行在に奔赴す。河池郡に及びて、玄宗に謁見す」

玄宗の後を追いかけた高適が駱谷道を通ったことは、顔眞卿「正議大夫行國子司業上柱國金鄉縣開國男顔府君（允南）神道碑銘」（四部備要本『顔魯公文集』卷八）にも、記されている。

「（天寶）十五年、長安陷ち、輿駕　蜀に幸す。朝官多く駱谷を出で興道に至る。房琯・李煜・高適等數十人、盡く在り」

駱谷道は、盩厔（現在の周至縣）から西南に下り、駱谷關、華陽關を通って、興道（現在の陝西省洋縣）に抜ける間道である。河池郡は、現在の陝西省鳳州。嚴耕望『唐代交通圖考』第三卷（一九八五年　中央研究院歷史語言研究所）の「唐代秦嶺山脈西段諸谷道圖」を勘案するに、高適は、おそらく興道から西へ漢水をさかのぼって梁州（現在の漢中市）に出、そこから西北へ褒斜新道を通って河池郡に出たところで、玄宗の一行に合流したのであろう。『資治通鑑』や『舊唐書』玄宗紀によれば、玄宗が河池郡にたどりついたのは、長安脱出後、十二日めの六月二十四日のことであった。

玄宗は、この後、七月十日に益昌縣（現在の四川省廣元市）に着き、吉柏江（嘉陵江）を渡って、十二日に普安郡（現在の劍閣縣）に着く。そして十五日に、玄宗は、皇太子（肅宗）を天下兵馬元帥として、朔方・河東・河北・平盧節度都使に任命した。また永王璘を江陵府都督として、山南東道・嶺南・黔中・江南西道節度都使に、盛王琦を廣陵郡大都督として、江南東路・淮南・河南等路節度都使に、豊王珙を武威郡都督として、河西・隴右・安西・北庭等路節度都使に任命した。

ここで一つ問題がある。すでに指摘したように、『資治通鑑』や『舊唐書』玄宗紀では、永王璘が江陵府都督・山南東道等節度都使に任命されたのは、玄宗が普安郡に到着して以後の七月十五日のこととする。ところが『舊唐書』玄宗諸子（永王璘・涼王璿）傳には、それぞれ次のような記述がある。

「（天寶）十五載六月、玄宗蜀に幸す。漢中郡に至り、詔を下して、璘を以て山南東路及び嶺南・黔中・江南西路四道節度採訪等使、江陵郡大都督と爲す。余は故の如し」（『册府元龜』卷二八一もほぼ同じ）

「天寶十五載六月、玄宗蜀に幸す。儀王已下十三王從う。漢中郡に

至り、永王璘を遣して、出でて荊州に鎮せしむ」

すなわち玄宗は、河池郡から嘉陵江に沿ってまっすぐ成都を目指したのではなく、褒斜新道を通って漢中郡（現在の陝西省漢中市）に立ち寄り、そこで永王璘を荊州に派遣する命令を出しているのである。河池郡（六月二十四日）から益昌郡（七月十日）につくまでに十六日も費やしている（『舊唐書』玄宗紀）理由は、これで説明がつく。では、『資治通鑑』や『舊唐書』玄宗紀は、玄宗が漢中郡に立ち寄った事實をなぜ記していないのだろうか。

この點に關しては、岡野誠氏に「唐玄宗の蜀蒙塵路について」（明治大學社會科學研究所紀要第三十二卷第一號　一九九三年十月）と題する專論がある。氏に據れば、肅宗側には、永王璘が江陵大都督に任命された日付を、靈武で卽位した七月十二日よりも後にしておく必要があったのだという。なぜなら肅宗卽位以後の玄宗の任命は、すべて無効にすることができるからである。したがって玄宗が永王璘を江陵大都督に任命した十二日以前の出來事を、普安郡を過ぎた十五日になってからのことにするために、玄宗が漢中郡に立ち寄った事實そのものまで抹殺してしまったのだとする。

こうして『資治通鑑』や『舊唐書』玄宗紀から、漢中郡に關する史實が消され、十六日間の空白だけが殘ることになった。しかし、漢中郡における玄宗の公式記錄の抹殺は他の文書にまでは十分に及ばず、『舊唐書』玄宗諸子傳その他に痕跡が殘ってしまったのである。詳細は、岡野氏の論文を參照されたい。

さて、河池郡で玄宗の一行に追いついた高適は、玄宗に對して積極的に發言し始める。まず潼關陷落の原因に關して、監軍李大宜の腐敗ぶりを指摘することによって、守備軍の責任者哥舒翰を辯護し、また楊國忠が自分の建策を受け入れなかったことが今日の事態を招いた以上、玄宗が責任を感ずる必要はないと主張して、玄宗に褒められ、侍御史の職を與えられる。さらに成都に着いた後の八月には、諫議大夫に拔擢される。

玄宗が漢中郡で永王璘ら諸王を各地に分鎮せしめた時、それに强力に反對したのは高適であった。『舊唐書』高適傳では、「初め、上皇（玄宗）諸王を以て分鎮す。適、切に諫めて不可とす」と記されていて、永王璘を江陵大都督に任命した直後に、高適が諫言したように讀めるが、『資治通鑑』では「諫議大夫高適、以て不可と爲す」となっており、それだと諫言したのは成都に着いて以後のことになる。

いずれにしても、高適の諫言は納れられなかった。しかし、諸王のうち、實際に任地に赴いたのは、永王璘だけであった。『舊唐書』玄宗諸子傳によれば、永王璘は、七月には襄陽に至り、九月には江陵に着任、すぐさま數萬人の兵士を召募し、江陵に山積みされていた江淮から集めた鉅萬の租賦を費消して、戰爭の準備を整え始めた。それを聞いた肅宗は、永王璘に對し、すぐに蜀にもどるように命令を出したが、永王は聞き入れず、十二月二十五日には、五千の兵を載せた艦隊を率いて、長江を下り、廣陵へと向かったのである。

これより先、すでに永王璘が反旗を飜したとみなした肅宗は、十一月、「諸王分鎮」に反對していた高適を、長安の西北にある彭原に召し出して、意見を求めた。[1] 成都で玄宗から諫議大夫に拔擢されていた高適は、このころすでに玄宗の側近からけむたがられる存在になっていた。『舊唐書』高適傳は「氣を負うて敢えて言う。權幸、之を憚る」、また『新唐書』高適傳も「氣を負うて敢えて言う。權近、側目す」と記している。肅宗に召し出された高適が、永王璘討伐に積極的だった

背景には、成都での自分に對する冷たい視線が影響しているのかもしれない。

高適は、肅宗に對し、「江東の利害と永王の必ず敗れんことを陳べ」た。肅宗は「其の對えを奇とし」、十二月九日、高適を御史大夫・揚州大都督府長史・淮南節度使に任命し、淮西節度使來瑱・江東節度使韋陟とともに、永王璘討伐に向かわせたのである。[2]

二　永王璘の東巡と李白

安祿山の亂が起こって以後の李白の行動には、不明な部分が多い。今かりに安旗・薛天緯『李白年譜』（一九八二年　齊魯書社）に據りつつ、その行跡をたどっておこう。

天寶十四載、五十五歳の李白は、夏に當塗（現在の安徽省當塗縣）に遊び、さらに長江をさかのぼって秋浦（安徽省貴池縣）まで行ったが、冬には宣城（安徽省宣州市）に引き返し、ついで金陵（南京）へ出向いたところで、安祿山の亂が起こったことを知った。李白は、門人の武謂に山東にいる子女を南方に避難させるように依頼するとともに、みずからは宋城（河南省商丘市）にいた妻の宗氏を迎えに行く。[3] 翌年春、宗氏を伴って南へ逃げた李白は、當塗・宣城、さらには剡中（浙江省嵊縣）まで避難の旅を續けるが、秋になって、潼關が陷落し、玄宗が蜀に蒙塵したことを知ると、長江に沿って西へ向かい、廬山に隱れる。そしてその年の暮れ、永王璘からの三度に及ぶ辟書によって、ついに永王の幕下に加わる決心をしたのである。彼は、明くる正月、尋陽（江西省九江市）で、長江を下って來た永王の水軍に合流した。この時の李白の昂揚した氣分は「永王東巡歌」十一首[4]などによく表れている。ここにその第二首を擧げておこう。

三川北虜亂如麻　　三川の北虜　亂れて麻の如し
四海南奔似永嘉　　四海　南奔すること　永嘉に似たり
但用東山謝安石　　但だ用いよ　東山の謝安石
爲君談笑靜胡沙　　君が爲に　談笑して　胡沙を靜めん

洛陽一帶にのさばる野蠻人どもによって、戰亂に卷きこまれた人々は、晉の永嘉の亂の時のように、一齊に南方へ避難を始めている。あの時、東山に隱棲していた謝安石が乘り出したように、もしも私を起用してくださるならば、君王のために、談笑しているうちに、えびすの砂塵を靜めてご覽に入れましょう。

この時の李白は、永王璘が肅宗から賊軍と見なされ、討伐の對象になっていることなど、知るよしもなかったであろう。

破竹の勢いで長江を攻め下った永王は、丹陽城（江蘇省鎭江市）に入ったところで、廣陵（江蘇省揚州市）長史・淮南采訪使の李成式や河北招討判官の李銑らの抵抗にあう。急ごしらえの烏合の集團は、官軍の攻擊を受けると、あっけなく瓦解した。部下の季廣琛や渾惟明・馮季康らが官軍に投降すると、永王は一族とごくわずかの側近を伴い、宵にまぎれて逃亡、いったん晉陵（江蘇省常州市）へ奔った後、今の江西省の鄱陽郡、そして余干へ逃げ、さらに大庾嶺までたどりついたところで、江西採訪使皇甫侁の部下に捕えられ、殺された。[5]『資治通鑑』によれば、それは二月二十日のことであった。

この間、李白はいったいどうしていたのであろうか。總大將の永王璘が逃亡して、味方が總崩れになる中を、李白も必死で逃げていた。その時のありさまを、彼は「南奔書懷」[6]（卷二十二）で、次のように詠んでいる。

主將動讒疑　主將　動もすれば讒疑し
王師忽離叛　王師　忽ち離叛す
自來白沙上　白沙の上りに來たりしより
鼓譟丹陽岸　鼓譟す　丹陽の岸
賓御如浮雲　賓御　浮雲の如く
從風各消散　風に從って　各おの消散す

部將たちはお互いに疑心暗鬼に陷って、永王の軍隊はたちまちばらばら。白沙洲のあたりまで來た時、丹陽の岸邊で突擊の太鼓がとどろくと、幕僚たちは、まるで空に浮かぶ雲のように、風とともにどこかへ消えてしまった。

李白は、長江に沿って西へ逃げ、舒州（安徽省潛山縣）に落ちのび、さらにその西にある太湖縣の司空山に隱れるが、まもなく逮捕され、尋陽の獄につながれてしまったのである。

李白は、永王璘追討の總大將である高適に對し、かつてともに梁宋の間を漫遊したよしみに一縷の望みを託して、助命を乞う信號を送っている。「張秀才の高中丞に謁するを送る詩并序」（卷十五）がそれである。(7) まず序文で「余時に尋陽の獄中に繫がれ、正に〈留侯傳〉を讀む。秀才張孟熊は胡を滅すの策を蘊え、將に廣陵に之きて高中丞に謁せんとす……」と記し、詩の後半で高適を稱えて、次のように詠む。

胡月入紫微　胡月　紫微に入り
三光亂天文　三光　天文を亂す
高公鎭淮海　高公　淮海に鎭し
談笑廓妖氣　談笑して　妖氣を廓く
採爾幕中畫　爾が幕中の畫を採り
戡難光殊勳　難に戡ちて　殊勳を光かせん
我無燕霜感　我に燕霜の感無く
玉石俱燒焚　玉石　俱に燒焚す
但灑一行淚　但だ一行の涙を灑ぎ
臨岐竟何云　岐に臨んで竟に何をか云わん

えびすの月が紫微宮に入りこんで、宇宙の秩序をかき亂した。高適どのは淮海の鎭撫として、談笑の間に妖氣を取り除こうとしておられる。張君の計劃を採用し、この難局に打ち勝って、きっと輝かしい功績をあげられるに違いない。その昔、鄒衍は、燕の惠王のために忠義を盡くしたにもかかわらず、讒言を信じた惠王によって投獄され、天を仰いで哭したところ、それに感じた天は、眞夏に霜を降らせたという。しかし私には、天を感じさせた鄒衍のような忠義の行ないとてなく、いまや玉も石も取り混ぜて燒き捨てられようとしている。こうなっては、ただ一すじの涙を流すだけだ。君との別れにのぞんで、いまさら言うことはなにもない。

肅宗から永王璘討伐の命を受けた高適は、來瑱・韋陟らと安陸に集結した後、揚州大都督府長史・淮南節度使として、揚州に着任していたのである。李白が、高適からの救いの手をひそかに期待していたことは、右の詩からも明らかであろう。しかし、高適からは、なんの反應もなかった。周勳初『高適年譜』は「高適は、李白の厄難に對し、幇助する所無きに似たり」と言う。永王璘討伐の總大將としては、いくらかつての知り合いとは言え、便宜をはからうことが難しかったのであろう。

もちろん李白は、高適だけに期待していたわけではなく、みずからを救うために八方手を盡くしている。宰相の崔渙らに宛てて、たびたび救いを求める詩文を書き送っているのも、その一つである。[8]『新唐書』崔渙傳および『資治通鑑』によれば、巴西（四川省綿陽市）刺史[9]だった崔渙は、蜀へ蒙塵する玄宗を出迎えて、氣に入られ、即日、黄門侍郎・同中書門下平章事を拜し、成都に同行する。やがて肅宗が即位したことを知った玄宗の命により、韋見素や房琯らとともに、傳國の寶と玉册を渡すために、靈武に派遣される。そして肅宗から江淮宣諭選補使に充てられ、在野の遺逸を捜し出す任務についた。李白が崔渙宛に何度も助命の嘆願をしているのは、こういう崔渙の肩書と無關係ではあるまい。

やがて李白は、御史中丞・江南西道採訪使・宣城太守だった宋若思が、呉の軍勢三千を率いて、河南に向かう途中、尋陽に立ち寄った際に、獄中から救い出される。宋若思の父である宋之悌（宋之問の弟）が、李白と舊知の間柄であったことが幸いしたのである。[10]もちろん江淮宣諭選補使崔渙の努力もあった。そのことは、「宋中丞の爲に、自らを薦むる表」（巻二十六）に、「前後して宣慰大使崔渙及び臣（宋若思）の推覆清雪を經て……」と言い、また「中丞宋公、呉の兵三千を以て河南の軍に赴き、尋陽に次して、余の囚を脱し、幕府に參謀たらしむ。因りて之を贈る」と題する詩（巻十）によって、明らかである。なお、崔渙は、この後すぐの八月八日（『新唐書』肅宗紀）には、「聽受に惑わされ、下吏の鬻ぐ所と爲り、濫りに進む者一に非ず」（『舊唐書』崔渙傳）、結局、その職にはふさわしくないとの理由で、余杭（杭州）太守に配置替えになってしまう。李白を助けたことと、あるいは關係があったのかもしれない。

出獄した李白は、宋若思の幕府にあって、しばらく文書の代作に勵んでいる。[11]しかし、それも九月には、その任務を離れ、尋陽から長江を隔てた北側にある宿松（安徽省宿松縣）で病床に臥したことになっている。年末になって、李白の夜郎流罪が決まったことを考えると、宋若思や崔渙らの口添えで、彼が出獄したことに對して、中央からクレームがついたのではないかと思われる。病氣というのも、おそらく口實に過ぎまい。

李白は、宿松でも、張鎬に宛てて、救いを求める二首の詩「張相鎬に贈る」（巻十）を作っている。張鎬は、『舊唐書』張鎬傳によれば、天寶の末、楊國忠によって、左拾遺に抜擢された人で、玄宗が蜀に蒙塵する時、徒歩で隨行し、その後、肅宗に從って、鳳翔に行き、中書侍郎・同中書門下平章事を拜している。そして、八月、崔渙が江淮宣諭選補使を免ぜられた後、兼河南節度使・持節都統淮南等道諸軍事に任命されている。したがって李白が張鎬宛に詩を贈ったのは、彼が赴任して以後のことになる。

十二月三日、玄宗が成都より一年半ぶりに長安に歸るのを待って、肅宗は、十五日に、天下に恩赦の令を出した。安祿山や李林甫・楊國忠ら反逆者と見なされた者の子孫を除いて、成都や靈武に扈從して功績を立てた者や、各地で壯烈な戰死を遂げた者の子孫には、それぞれしかるべき恩賞が與えられた。玄宗や肅宗が滯在した土地も昇格し、成都を南京、鳳翔を西京と改めた。李白が「上皇西巡南京歌」十首を作ったのは、この時である。しかし、李白の夜郎流罪は、すでに決まっていたのである。『新唐書』肅宗紀によると、長安歸還を祝って「民に酺すること五日」、すなわち民衆に五日間、酒食を賜った。しかし、罪人李白は、もちろんその祝宴に參加することはできなかった。

「夜郎に流され、酣を聞けども預からず」と題する詩（巻二十三）は、この時の氣持を詠んだものである。

この後、李白は、三峽をさかのぼり、白帝城まで來た時、やっと恩赦にあずかることになる。

三　李白と高適・杜甫三詩人の交遊

以上、安祿山の亂以後、高適と李白がたどった行跡を、やや詳しく追ってみた。かつては杜甫とともに梁宋の間を仲よく漫遊した二人が、安祿山の亂によって、敵と味方に分かれてしまい、一方は勝者、一方は敗者となった。勝者となった高適は、敗者の李白を救わなかった。このことが、その後の兩者の關係惡化を決定的にしたと思われる。李白は、高適を恨んだであろうし、高適もまた永王璘討伐の責任者として、李白を助けるわけにはいかなかったのであろう。そしてこの結果、二人の詩文集から、かつての漫遊の記錄が抹殺もしくは隱蔽されることになったと思われるのである。

杜甫は、「遣懷」（影宋本『杜工部集』巻七）[12]と題する詩で、天寶三載の夏から秋にかけて、ともに遊んだ時の思い出を、次のように詠んでいる。

昔我遊宋中　　昔　我　宋中に遊ぶ
惟梁孝王都　　惟れ梁の孝王の都なり
……　　……
憶與高李輩　　憶う　高（適）・李（白）が輩と
論交入酒壚　　交りを論じて　酒壚に入る
兩公壯藻思　　兩公は　藻思　壯んなり
得我色敷腴　　我を得て　色　敷腴たり
氣酣登吹臺　　氣　酣にして　吹臺に登る
懷古視平蕪　　古えを懷うて　平蕪を視る

宋中とは、宋州城内の意。宋州は、現在の河南省商丘市付近にあった。その昔、漢の文帝の子である梁の孝王が封じられた地域。吹臺は、もともと春秋時代の師曠が樂器を演奏させたところで、梁の孝王が增築して音樂を樂しんだと言われる。『元和郡縣圖志』巻七によると、梁王の吹臺は、汴州開封縣の東南六里にあった。

杜甫は、「昔遊」（巻六）と題する詩でも、次のように歌う。

昔者與高李　　昔　高（適）・李（白）と
晚登單父臺　　晚に單父の臺に登る

單父は現在の山東省單縣で、唐代には宋州府に屬していた。孔子の弟子で、かつてこの町の宰（縣長）だった宓子賤が、琴を彈くだけで町を治めたとして知られるところ。[13]『太平寰宇記』巻十四によれば、宓子賤が琴を彈いたと傳えられる琴臺は、高さが三丈、單父縣の北一里にあった。

高適の詩集には、「臺公と同に、秋　琴臺に登る」（孫欽善『高適集校注』一九八四年　上海古籍出版社による。以下同じ）と題する詩があり、すでに諸家が考證しているように、この詩が、李白や杜甫とともに單父の琴臺に登った時に作ったものであることは確かであろう。[14]しかし、現存する李白の詩集には、この時のことを歌った詩は、殘っていない。もっとも李白には、「秋　孟諸に獵し、夜歸りて單父の東樓に置酒し

て、妓を觀る」（巻十七）と題する詩があり、安旗・薛天緯『李白年譜』は、杜甫や高適とともに遊んだ時の作であるとするが、地名以外に證據となるものはなにもなく、推測の域を出ない。詹鍈『李白詩文繫年』（一九八四年　人民文學出版社）は、もっと早い時期、李白が東魯にいた開元二十五年ごろの作とし、黄錫珪『李太白年譜』（一九五八年作家出版社）は、もっと遲い時期の天寶八載に比定している。

高適は、この後間もなく、梁宋を離れて、「東征」する。[16] 高適は、この時、「宋中にて周・梁・李の三子に別る」と題する詩を作っている。このうち、李については、次のように詠む。

李侯懷英雄　　李侯は英雄を懷う
骯髒乃天資　　骯髒　乃ち天資なり
方寸且無間　　方寸　且つ間無く
衣冠當在斯　　衣冠　當に斯に在るべし

李侯は、いつも英雄を頭に思い描き、その信念を曲げないところは、まさに天賦の資質そのもの。胸の内は雑念にまぎれることがない。かかる人にこそ官位が與えられるべきなのだ。

諸注が言うように、周と梁が誰を指すのかは分からない。ただ李侯については、つとに聞一多『少陵先生年譜會箋』（一九五六年　古籍出版社　聞一多全集選刊之三『唐詩雜論』）が「白を謂うに似たり」として以後、李白に比定する説が有力である。劉開揚『高適詩集編年箋註』（一九八一年　中華書局）は、聞一多説を引いて、「如し然らば、當に單父・吹臺に同遊の後……に作るべし」とし、孫欽善『高適集校注』も、聞一多説を引いて、「詩中の事蹟に據れば、此の説は成立すべし」と言う。

周勳初『高適年譜』は、さらに一歩を進めて、「李侯は當に李白を指すべし」と斷定している。しかし、このなかに杜甫がおらず、また周と梁と李の三人がいったいどういうグループなのか不明である以上、李白と斷定するには、なお證據不十分と言えるのではないだろうか。

ここで、高適の詩題に「羣公」とあるものに注目してみたい。いま、孫欽善『高適集校注』によって、詩題に「羣公」と記されているものを拾い出してみると、以下のようになる。括弧内は、孫氏による製作年代と羣公についての孫氏のコメントを記す。[16]

① 「同羣公秋登琴臺」（天寶三載。羣公、指李白等人）
② 「同羣公宿開善寺贈陳十六所居」（天寶四載夏。羣公、指李白等）
③ 「同羣公登濮陽聖佛寺閣」（天寶五載秋、時與李白・杜甫等人由東平來遊濮上）
④ 「同羣公題鄭少府田家」（天寶五載、與李白・杜甫等遊濮上）
⑤ 「同羣公十月朝宴李太守宅」（天寶五載冬）
⑥ 「同羣公出獵海上」（天寶五載冬。羣公、指李白・杜甫等人）
⑦ 「同羣公題中山寺」（天寶三載至五載、與李白・杜甫等同遊汴・梁・洛陽・齊・魯期間）
⑧ 「同羣公題張處士菜園」（此詩作於與李白杜甫等遊汴・梁・洛陽・齊・魯期間、姑編於此）

① 「同羣公秋登琴臺」と題する詩は、高適が、李白や杜甫と單父の琴臺に登った時に作ったものであり、この「羣公」が李白と杜甫を指していたことは、すでに述べた。

周勳初氏によれば、高適は、天寶三載の秋の末、梁宋を離れて東征、翌年に襄賁（現在の江蘇省漣水縣の北）に行き、そこから北上して

東平、汶陽、魯郡、曲阜等の地を訪れ、さらにその翌年の天寶五載夏、北海の李太守すなわち李邕に招かれた時に、李白や杜甫と再會したとする。しかし、孫欽善氏によれば、天寶三載九月、高適はいったん東南の楚の地に遊んだ後、年末には宋中にもどり、翌天寶四載の春から夏にかけて、李白らと開封や洛陽に遊び、秋になって山東に赴いたとする。[17] 孫氏によれば、このころ高適が開封で作った「別楊山人」と題する詩は、『文苑英華』巻二三一では「送楊山人歸嵩陽」となっており、李白にほとんど同題の「送楊山人歸嵩山」詩（巻十五）があること、また高適の「送蔡山人」詩と同題の詩が李白（巻十五）にも見えることから、これらの詩は二人がともに開封で作ったと推定する。

②「同羣公宿開善寺贈陳十六所居」詩の開善寺は、孫氏の考證によれば、『洛陽伽藍記』に見えるそれで、同じく天寶四載夏に李白らと洛陽に遊んだ時の作である。ただ残念ながら、李白や杜甫には、この時に作った詩は残されていない。

孫氏によれば、翌天寶五載の秋、高適は、李白や杜甫らと東平から濮陽一帯に遊び、多には、彼らとともに北海郡に行って、太守の李邕と會った。③「同羣公登濮陽聖佛寺閣」および④「同羣公題鄭少府田家」の二首は、三人が濮陽一帯に遊んだ時の作であるとするが、これも李白と杜甫には、その時の詩が残っていない。⑤「同羣公十月朝宴李太守宅」詩については、杜甫に「陪李北海宴歴下亭」および「登歴下古城員外孫新亭北海太守李邕同前」（巻一）と題する詩があり、後者には、「亭は鵲湖に對す」という杜甫の自注がついている。また李白には「上李邕」（巻八）、「陪從祖濟南太守泛鵲山湖」三首（巻十八）と題する詩が残っている。「上李邕」詩がはたしてこの時の作かどうかについては異論があるし、後者の詩題に見える從祖が誰を指すかについても不明なところがあるものの、[18] 高適の言う「羣公」が、李白と杜甫等を指している可能性は大きいと思われる。

⑥「同羣公出獵海上」と題する詩も、孫氏によれば、その詩中に見える「幽都」（現在の河北省薊縣）や杜甫の「壯遊」詩に見える「青丘」（北海郡千乘縣）などの地名から、李邕を訪ねたころの作とする。

以上の諸例を検討して分かるように、⑧の例がやや不明確ながら、「羣公」と詩題に記されている詩のほぼすべてが、天寶三載から五載にかけて作られていること、しかも孫氏が注記するように、その「羣公」がいずれも李白・杜甫、あるいは李白を指している可能性が大きいことである。このことから、さらに推理を働かせるなら、もともと「羣公」にあたる部分には、固有名詞が書かれていたのではなかったろうか。ところが、李白が後に反亂軍に加わって罪を得たため、彼の名前をみずからの詩文集から削るために、わざわざ「羣公」と改めたのではないかと考えられるのである。[19]

「羣公」に似た表現として、高適は「諸公」を使っている。例えば「同諸公登慈恩寺浮圖」（天寶十一載秋）。孫氏によれば、この「諸公」は、杜甫・岑參・薛據・儲光羲等を指し、李白は含まない。このほか、「留別鄭三韋九兼洛下諸公」（天寶八載）、「酬秘書弟兼寄幕下諸公」（天寶九載冬）など、いくつかの用例を調べて見ると、「諸公」は、大勢、少なくとも三名以上の場合に使われている可能性があり、しかも李白を含んでいない。

また二名の場合は、例えば「同韓四薛三東亭翫月」、「酬別薛三蔡大留簡韓十四主簿」、「同敬八盧五汎河間清河」、「同崔員外綦母拾遺九日宴京兆府李士曹」のように、必ずその名前を擧げて、「羣公」あるい

は「諸公」などと省略することはない。

論證はまだ不十分ながら、以上のことから、「羣公」が、李白の名前を避けるために、意圖的に使われていることは、ほぼ明らかになったのではないだろうか。

おわりに

杜甫が、李白と高適の名前を擧げて、ともに漫遊した時のことを懷かしく回顧した作品を殘しているのは、その事を隱蔽する必要など全くなかったからである。しかし、高適の方は、謀反人となった李白とのかつての親密な關係を、世間に、あるいは後世に知られたくはなかったにちがいない。ただ高適は、「羣公」という表現で、とにもかくにも當時の交遊の證據となる作品を殘してくれた。ところが李白の方は、高適とかかわっていることが歴然としている詩は殘していない。李白の作品は、そのかなりの部分が失われているため、確實なことは斷言できないものの、やはり高適とかかわりのある詩を意圖的に抹殺したと見てよいのではないだろうか。

今後の李白と高適の研究にとって、このことは一つの鍵になる問題を含んでいると考えられる。本論がそのヒントになれば幸いである。

注(1) 『資治通鑑』に據れば、七月十二日に靈武で卽位した肅宗は、九月十七日に靈武を出發、二十五日に順化郡へ、十月三日には彭原まで南下し、一擧に長安奪回を圖った。しかし、兵馬元帥房琯が、咸陽郊外の陳濤斜で大敗したため、肅宗は、翌年一月十五日に保定、そして二月十日に鳳翔に移動するまで、しばらく彭原にとどまっていたのである。高適が彭原に召し出されたのが、十一月だったことも、『資治通鑑』に見える。

(2) 『舊唐書』高適傳には「適を以て御史大夫・揚州大都督府長史・淮南節度使を兼ねしめ、詔して江東の節度來瑱と與に、本部の兵を率いて、江淮の亂を平げ、安州に會せしむ」とあるが、これには誤脫があろう。いま『新唐書』高適傳が「(高適を)揚州大都督府長史・淮南節度使に除し、詔して江東の韋陟・淮西の來瑱と與に、師を率いて安陸に會せしむ」とするのに據る。『資治通鑑』至德元載十二月の條には、このことをさらに詳しく記している。

(3) 松浦友久「李白における安史の亂(上)」(「中國文學研究」第十二期 一九八六年十二月)は、「安史の動亂の初期において、李白は一貫して長江地區に在ったと判斷される」として、この時、李白が妻の宗氏を迎えに宋城へ行ったとする安旗氏らの說を否定している。

(4) 京都大學人文科學研究所影印靜嘉堂文庫藏宋本『李太白文集』卷七。以下、『李太白文集』の卷數は、同書による。

(5) 『舊唐書』永王璘傳や『唐會要』卷五では、捕えられた後、矢傷がもとで死んだとするが、『新唐書』永王璘傳や『資治通鑑』は、皇甫侁に殺されたと記している。

(6) 宋本の題注には「一作自丹陽南奔道中作」と記す。なお、松浦友久「李白における安史の亂(中)」(「中國文學研究」第十三期 一九八七年十二月)は、「南奔書懷」詩を、「李白が永王とともに晉陵に南奔する途上の作、とほとんど斷定してよい」という。

(7) 高適は、翌乾元元年五月に書いた「職を罷めて京に還るさ、睢陽に次し、張巡・許遠を祭る文」で、みずからの肩書を太子詹事・御史中丞と記しており、李白が高中丞と言うのに一致する。周勛初『高適年譜』等が指摘しているように『舊唐書』高適傳が御史大夫とするのは誤りである可能性がある。

(8) 「獄中上崔相渙」(卷十)、「繫尋陽上崔相渙」三首(卷十)、「上崔相百憂章」(卷二十二)、「萬憤詞投魏郎中」(卷二十二)など。

(9) 『舊唐書』崔渙傳では、劍州刺史とする。

(10) 郁賢皓「李白詩《江夏別宋之悌》繫年辨誤」(『李白叢考』一九八三年陝西人民出版社)に、考證がある。松浦友久「李白における安史の亂(中)(下)」「中國文學研究」第十三・十五　一九八七年十二月・八九年十二月)をも參照。

(11) 「爲宋中丞請都金陵表」(卷二十六)、「爲宋中丞自薦表」(卷二十六)、「爲宋中丞祭九江文」(卷三十)。

(12) 杜甫の詩は、一九六七年臺灣學生書局影宋本『杜工部集』による。

(13) 『呂氏春秋』察賢篇に見える話。

(14) 劉開揚『高適詩集編年箋註』(一九八一年　中華書局)、周勳初『高適年譜』などを參照。

(15) 「東征の賦」に、「歳は甲申(天寶三載)に在り、秋窮まる季月、高子梁に遊びて既に久し。方に楚に適きて以て超忽せんとす」と言う。

(16) 劉開揚氏による製作年代は若干異なっており、孫氏のように、「羣公」をすべて李白と杜甫に結びつけてはいない。例えば②の詩は、洛陽での作とし、李白を含んでいない。また③の詩については、黄錫珪『李太白年譜』が李白と同じく濮陽に行った時の作とするのに對し、「恐らくは未だ必ずしも然らざらん」と言う。さらに⑤・⑥・⑦・⑧についても、李白に直接結びつけてはいない。しかし、ここは孫氏の說が的を射ていると見てよいだろう。

(17) 高適が李白や杜甫と山東で再會した年を、安旗氏らは、天寶四載のこととする。

(18) 李白「上李邕」詩は、錢謙益「少陵年譜」以來、天寶四、五載の作とされて來たが、安旗氏は、もっと早い時期、李邕が開元年間に四川の渝州(重慶)刺史をしていたころに贈った詩であろうとする。「陪從祖濟南太守泛鵲山湖」詩三首については、從祖濟南太守を誰に比定するかについて、諸注はほとんど何も記していない。詹鍈『李白詩文繫年』(一九八四年　人民文學出版社)は、「惜不知濟南太守究爲何人耳」と言い、瞿蛻園・朱金城『李白集校注』も、詹鍈の言葉を引用するだけである。しかし、この從祖が李邕である可能性はないかについても、檢討してみる必要があるのではないだろうか。

(19) 「羣公」という語そのものは、つとに『詩經』大雅・雲漢に「羣公先正、則不我助」などと使われており、李白や杜甫にも、複數の人々を指す語として、いくつか用例が見える。